なぜ英語が話せないの

〈48〉

会話上達法—第三部—

恥ずかしがらずに…

考え込むのはよくない

映画評論でおなじみの淀川長治さんは、自らの会話を「むちゃくちゃ英語」と称している。

米国でイチジクの木の下にアメリカ人と立っていたとき「イチジクの葉」（FIG LEAVES）がどうしても出てこず「アダムのパンツ」と言ったら、相手は大いに感心した顔で笑いこけた。

ニューヨークのホテルで、英語の達者な人が二人サービス係に通じない。淀川さんは、とっさにデビット・ニーブンとデボラ・カーの〝旅路〟の原名が「SEPARATE TABLE」（別々のテーブル）と思い出して「セパレイト・ルーム」とやったら、すぐに通じた。ついでに「私たちはホモの仲じゃない」とつけ加えると、係りは大げさにウインクした。

分の部屋（二室）を注文したが、フロントのルーム・サービス係に通じない。淀川さんは、とっさにデビット・ニーブンとデボラ・カーの〝旅路〟の原名が「SEPARATE TABLE」（別々のテーブル）と思い出して「セパレイト・ルーム」とやったら、すぐに通じた。ついでに「私たちはホモの仲じゃない」とつけ加えると、係りは大げさにウインクした。

「日本人の英会話下手は、恥の文化と完全主義からきている」と指摘する向きは多い。外国語は流ちょうに話せなくて当たり前。会話に自信がなくてもひらき直ってやれば、意外に意思疎通ならうまくいく。完全な文章を言おうとして、考え込むのもよくない。淀川さんは二十七歳のとき、クリッジ号の船室でチャプリンと四十分間も二人きりで休むまもなくしゃべった。

〝駅馬車〟を二十八回も見たほどの洋画通だけに、英語の表現力、会話力はなくても、話は通じた。専門分野のことはカタコト英語で十分。相手の関心を自分の精通していることに向けさせれば、会話はラクである。

淀川さんは、ロレッタ・ヤングがアカデミー賞をもらったとき「ついに」という「AT LAST」の間にLONGを入れて「アト・ロング・ラスト」と言ったのを覚えていた。そこでハリウッドで彼女に会ったとき「AT LONG LAST I VE MET YOU」といったら「OH!」と言って喜んだ。

レストランで「紅茶」を注文するときは「HOT TEA」（発音はハッティに近い）日本で言う「アイスティ」は「ICED TEA」（アイストティ）である。イタリアの西部劇は日本では「マカロニ・ウエスタン」だが、英語では「スパゲティ・ウエスタン」。日本人には耳慣れない単語、表現も多いが「要するに、恥ずかしがらず、相手をオヤッと思わせるセンスで英語をしゃべれば、道は通じる」と、淀川さんは話している。

「むちゃ英語」と称する淀川さん